

御使いたちと主の使い

さて、【主】の使いがギルガルからボキムに上って来て言った。「わたしはあなたがたをエジプトから上らせて、あなたがたの先祖に誓った地に連れて来て言った。『わたしはあなたがたとの契約を決して破らない。・・・』」(士師記 2:1)

聖書には御使いについて多く書いてあるけれども、ここでは御使いについて聖書が教えていることを手短かに説明する。

御使い

「御使い」(《ヘ》マラーク、《ギ》アングロス)は「使者(メッセンジャー)」を意味している。御使いたちは神の使者であり、しもべであり(ヘブ1:13-14)、天地が造られる前に神によって創造された(ヨブ38:4-7, 詩148:2, 5, コロ1:16)。

(1) 聖書には良い御使いと悪い御使いの両方が出てくる。けれどももともと御使いはみな良い、聖いもの、神の目的に仕えるものとして創造された(創1:31)。ところが選択の自由を持っていたために数多くの御使いが神に対するサタンの反抗に加担してしまった(エゼ28:12-17, Ⅱペテ2:4, ユダ1:6, 黙12:9, →マタ4:10注)。神のしもべとしての特権を拒んだその御使いたちは天での役割と地位を失った。新約聖書に出てくる悪霊はこの墮落した御使いと同類である(マタ25:41, →ユダ1:6注, →「サタンと悪霊に勝利する力」の項 p.1726)。

(2) 聖書は軍勢、つまり非常に多くの御使いが存在すると言っているけれども(Ⅰ列22:19, 詩68:17, 148:2, ダニ7:9-10, 黙5:11)、名前が記録されているのは「ミカエル」(ダニ12:1, ユダ1:9, 黙12:7)と「ガブリエル」(ダニ9:21, ルカ1:19, 26)だけである。また聖書は、神に仕えてその役割を果たす大軍の御使いたちには区分や階級があることを示している。たとえば、ミカエルは御使いのかしら(「主な御使い」、ユダ1:9, →Ⅰテサ4:16)と呼ばれている。「セラフィム」(イザ6:2)や「ケルビム」(エゼ10:1-3)、ある地域や物事に権威や支配力を持つ御使い(エペ3:10, コロ1:16)もまた、みこころのままに神に仕える無数の御使いの霊(ヘブ1:13-14, 黙5:11)なども存在する。

(3) 霊的存在である良い御使いは神を賛美し(ヘブ1:6, 黙5:11, 7:11)、みこころを行い(民22:22, 詩103:20)、自由に神の前に出ることができ(マタ18:10)、キリストに服従し(Ⅰペテ3:22)、ある意味で人間に勝り(ヘブ2:6-7)、天に住んでいる(マコ13:32, ガラ1:8)。結婚することなく(マタ22:30)、死ぬこともないけれども(ルカ20:34-36)、礼拝をされてはならない(コロ2:18, 黙19:9-10)。また人間の姿で(普通には若者として)現れることができる(⇒創18:2, 16, 19:1, ヘブ13:2)。

(4) 御使いたちは神の命令を受けて地上で多くの活動を行う。神の律法をモーセに啓示する際に独自の役割を果たした(使7:38, ⇒ガラ3:19, ヘブ2:2)。けれどもその最高の働きは人々を神との関係に回復するキリストの使命に奉仕することである(→マタ1:20-24, 2:13, 28:2, ルカ1:-2:, 使1:10, 黙14:6-7)。また、神の民のために奉仕し(ダニ3:25, 6:22, マタ18:10, ヘブ1:14)、教会の中でのキリスト者の生活を見守る(Ⅰコリ11:10, エペ3:10, Ⅰテモ5:21)。神からのメッセージを伝え(ゼカ1:14-17, 使10:1-8, 27:23-24)、祈りの応えをもたらす(ダニ9:21-23, 使10:4)、時には個人的に預言的夢や幻を解くのを助ける(ダニ7:15-16)。さらに、困難に直面している神の民を強め支援し(マタ4:11, ルカ22:43)、神を敬い悪を憎む人々を守り(詩34:7, 91:11, ダニ6:22, 使12:7-10)、神の敵を罰する(Ⅱ列19:35, 使12:23, 黙14:17-16:21)。聖書には御使いが悪霊の勢力と戦い(黙12:7-9)、罪びとが一人でも神に立返るなら喜び(ルカ15:10)、神を信じる人々を死後、天国に連れて行くこと(ルカ16:22)が書いてある。

(5) 終末の出来事の期間中、ミカエルと良い御使いたち対サタンと悪霊の戦いがさらに激しくなる(黙

12:7-9)。御使いたちはキリストの再臨のときにはキリストとともに来て(マタ24:30-31)、全人類のさばきに同席する(ルカ12:8-9)と聖書は言っている。

【主】の使い

これはときどき「神の使い」と言われているけれども、旧約聖書にも新約聖書にも現れる特異な御使いである。

(1) 最初に記録されているのは、荒野の中でハガルに現れたときである(創16:7)。そのほかには、アブラハム(創22:11, 15)、ヤコブ(創31:11-13)、モーセ(出3:2)、エジプトの奴隷状態から脱出するときの全イスラエル(出14:19)、さらに後にはボキムで(士2:1, 4)、バラム(民22:22-36)、ヨシュア(→ヨシ5:13-15、ここでは「主の軍の将」が「主の使い」と思われる)、ギデオン(士6:11)、ダビデ(1歴21:16)、エリヤ(Ⅱ列1:3-4)、ダニエル(ダニ6:22)、ヨセフ(マタ1:20, 2:13)などに現れている。

(2) 主の使いは一般の御使いたちの役割に似たいくつかの役割を果している。あるときは主からのメッセージを主の民に伝えるだけだった(創22:15-18, 31:11-13, マタ1:20)。別のときには神の民の必要を供給するために(Ⅰ列19:5-7)、危険から守るために(出14:19, 23:20, ダニ6:22)、敵を滅ぼすために(出23:23, Ⅱ列19:34-35, ⇒イザ63:9)送られた。神の民が激しく反抗するときには滅ぼすために主の使いが送られた(Ⅱサム24:16-17)。

(3) この主の使いが人々に話しかける話し方から、「これはだれなのかが今日まで議論されてきた。次のことに注意してもらいたい。

(a) 士師記2章1節で主の使いは、「わたしはあなたがたをエジプトから上らせて、あなたがたの先祖に誓った地に連れて来て言った。『わたしはあなたがたとの契約を決して破らない・・・』』と言っている。同じ事件を記録しているほかの聖句と比較してみると、これらのことは神ご自身がなされたことだった。アブラハムとイサクとヤコブに対して子孫がカナンの地を相続する(創13:14-17, 17:8, 26:2-4, 28:13)、そしてこの契約(終生協定)は永遠のものである(創17:7)と約束したのは神だった。イスラエル人をエジプトから連れ出し(出20:1-2)、約束の地へ導いた(ヨシ1:1-2)のも神だった。

(b) 主の使いがヨシュアの前に現れたとき、ヨシュアはひれ伏して拝んだ(ヨシ5:14)。このような反応から、多くの人はこの御使いは主である神ご自身が目に見える姿で現れたのだと信じるようになった。そうでなければほかの場合と同じように、その御使いはヨシュアに拝んではいけないと教えたはずである(⇒黙19:10, 22:8-9)。

(c) もっと明らかなことは、主の使いが燃える柴の中でモーセに現れたとき、「わたしは、あなたの父の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」(出3:6, ⇒創16:7注, 出3:2注)と言っていることである。

(4) 主の使いが神のように振舞い、また人間の姿で現れているので、これは処女降誕によって人間としてこの世界に来られる前のイエス・キリスト、三位一体の第二格である永遠のキリスト(三位一体の説明→マコ1:11注、「神の属性」の項 p.1016)ではないかとある人々は考えている。